阪大病院NEWS
No.70号
OSAKA UNIVERSITY HOSPITAL
2018(平成30)年4月25日発行
発行／大阪大学医学部附属病院広報委員会(総務課)
住所／〒565-0871大阪府吹田市山田丘2-15
TEL／06-6879-5021
http://www.hosp.med.osaka-u.ac.jp
禁転載（この紙面は再生紙を使っています）

新病院長インタビュー

総合力と医療安全で基幹病院の役割を果たす

――患者さんに信頼される病院に――

大阪大学医学部附属病院では、全ての診療科が密接に連携して日本トップレベルの高度な診療を行っており、地域の基幹病院としても高い評価を得ています。4月に着任した木村正病院長に、本院の診療・運営の特徴や今後の目標についてインタビューしました。

大阪大学医学部附属病院長　木村　正

大学病院の使命は、高度急性期医療、先端医療の研究開発、そして体系的な医療安全体制です。本院は、全ての診療科が密接に連携した「総合力」を活かし、先進医療・研究の拠点病院としての役割を果たしています。「医療安全」に関しても、常に難易度の高い診療を行っているため、リスクを管理しながらベストの治療成果を導き出せるよう、リスクマネジメントに力を入れています。

また本院は、患者さんに信頼していただける病院であることを重視しています。医師や看護師だけでなく、薬剤師、検査技師など全てのメディカルスタッフが、患者さんの診療にベストを尽くしたいと考え、日々行動しています。そのための力を最大限に引き出していける院内環境も実現できていると思います。

先端医療開発と希少疾患の解明

本院は臨床研究中核病院に指定されており、未来医療開発部を軸として、新しい医療を患者さんに提供するための臨床研究にも力を入れています。がんゲノム医療中核拠点病院に指定(本年2月16日)されたほか、希少な疾患や未診断の疾患に対する先導的な役割を果たす未診断疾患イニシアチブ(IRUD／Initiative on Rare and Undiagnosed Diseases)地域拠点病院の認定も受けています。本院の優れた基礎研究を患者さんに提供するための組織が整備されたことで、さまざまな腫瘍に対する最先端治療、希少疾患の解明、再生医療などの分野をさらに力強く進展させてまいります。

また、医学部学生はもちろん医師、看護師、薬剤師、検査技師などに対する生涯にわたる教育は非常に重要です。重症度の高い患者さんや難病患者さんをしっかりと診療して十分に専門性を高め、どのような症例にも対応できるような教育を実施していきたいと思っています。

私は、病院というのは、ひとつの街だと考えています。市民の皆さんが毎日、数千人単位で来院されます。その街をどのように作り発展させるのか。大阪大学は総合大学ですから、さまざまな分野の研究者に現場を見ていただき、本院の医療レベル向上のためのアイディアをいただきたいと思っています。現在、医療レベルの向上をめざす医工連携の国際医工情報センターなども活動しています。

「阪大病院ネット」で患者さんをサポート

他の医療機関では対応が難しい重症患者さんが、回復される、あるいは快方に向かわれることが、私たちの最大の喜びです。私自身、34年間の医師生活を通じて最も大切にしてきたことは、その患者さんの退院後の人生も考えたうえで、多様な選択肢のなかからベストな治療を提供することです。

また患者さんには、本院の機能をうまく使っていただきたいと思います。まず地元の医師に相談していただき、次に本院にご紹介いただくことで、高度な治療が必要な患者さんに、最も適切な医療を受けていただくことができます。

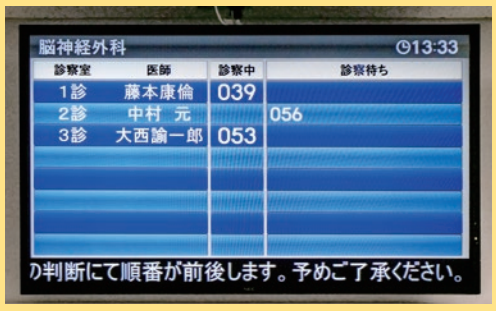
医療の目的は、健康を取り戻し、地域における従来の生活に戻っていただくことです。そのため本院では阪大病院ネットが稼働しています。同意された患者さんのカルテを、必要とする医療従事者が、連携医療機関において閲覧できるシステムで、地域の先生と連携をとりながら患者さんをサポートする地域医療連携システムです。急性期の治療は本院で、症状が改善すれば地域の医療機関で、患者さんに安心して過ごしていただけると思います。

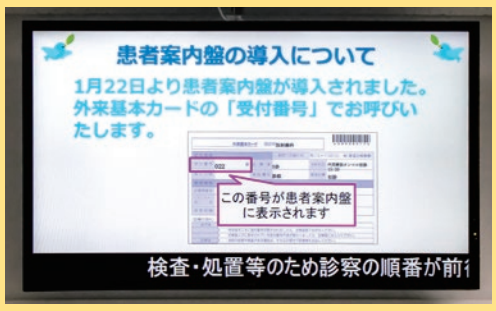
執行部一覧　2018年4月1日現在

病院長	
	木村　正
副病院長	
人事労務・医療安全	竹原 徹郎
再開発・がん診療	土岐 祐一郎
教育・診療体制・財務	樂木 宏実
ホスピタリティ	越村 利惠
病院長補佐	
小児・周産期・救急医療	大薗 恵一
研究・臨床研究中核病院	坂田 泰史
中央診療施設	富山 憲幸
広報・中期計画	野々村 祝夫
医療情報・地域医療・外部評価	松村 泰志
女性支援・ダイバーシティ	中島 和江
経営・組織改革	延原 寿男

外来案内表示盤システムを導入

診察状況が見えるから安心！





本院ではこれまで、患者さんを外来でお呼びする際に、マイク放送を使用していましたが、段階的に外来案内表示盤システムの導入を進めてきました。このたび一部外来で「外来案内表示盤システム」を追加導入しました。患者さんに待合で診察状況を確認していただくことができるようになり、利便性が増しました。

クリニカルシーケンス・ラボでの検査の様子

「がんゲノム医療中核拠点病院」に指定

全国的な体制構築に、より一層の貢献

本院は、平成30年2月16日付けで、がんゲノム医療中核拠点病院に指定されました。

がんゲノム医療中核拠点病院は、ゲノム医療を必要とするがん患者さんが、全国どこにいても、がんゲノム医療を受けられる体制を構築するため、がんゲノム医療を牽引する高度な機能を有する医療機関として指定されるもので、本院を含む国内11病院が指定を受けています。

がんゲノム医療とは、がん発症の腫瘍部及び正常部のゲノム情報を用いて治療の最適化・予後予測・発症予防を行う医療であり、本院では「がんゲノム医療センター」を中心として、遺伝子パネル等を用いたクリニカルシーケンス検査を行い、院内完結型のがんゲノム医療に取り組んでいます。

がん遺伝子パネル検査を行うにあたっては、タカラバイオ社との連携推進協定のもと、オンコロジーセンター5階に遺伝子検査室(クリニカルシーケンス・ラボラトリーズ)を設置しました。現在、CAP-LAP対応(CLIA準拠)認定を目指しており、国際基準の品質管理体制でのクリニカルシーケンスを実施していきます。その他にも、オンコロジーセンターにはがんゲノム医療にかかわるほぼ全ての部門が集約されており、患者さんや医療従事者にとってアクセスしやすい環境となっています。

また、本院は診療科横断的な遺伝カウンセリング体制を備えており、病院全体が一体となった体制構築により、専門性の高い人材育成や教育にも力を入れています。

今後は、効率的かつ効果的なゲノム医療の実装を目指すとともに、がんゲノム医療の全国的な体制構築に向けて、がんゲノム医療連携病院と連携し、がんゲノム医療の推進に貢献してまいります。

放射線部CTがリニューアル

平成29年12月に放射線部のCT装置の1台をリニューアルしました。新しい装置はX線管、検出器、寝台を新設計のものに変えて、面内、体軸方向ともに従来の約2倍の空間分解能(半分の大きさのものが見える)を実現しています。このためこれまでCT画像で表現されていなかった微細構造の大変鮮明な画像を得ることが可能になりました。撮影そのものは従来のCTと同様であり、患者さんへの追加のご負担はありません。高精細画像が重要である肺、小血管、耳などをはじめとする領域で診療に貢献しています。

また本年3月にIVR-CTもリニューアルしました。IVR-CTは腹部、胸部の画像下治療の中心的な装置です。従来使っていたものと比較し、治療中のCT撮影がより広範囲、頻回に行えるようになり、また寝台の微調整が容易になりました。このため、より安全にかつ短時間で治療が行えるようになりました。

高精細の画像が可能となったCT

IVR-CTもリニューアルしました

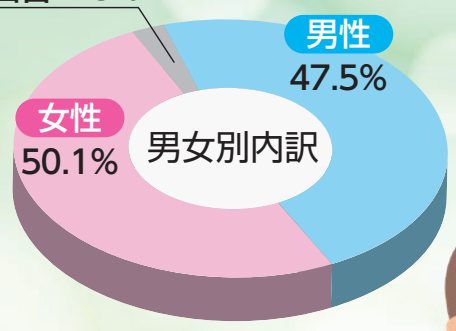
平成29年　秋の叙勲

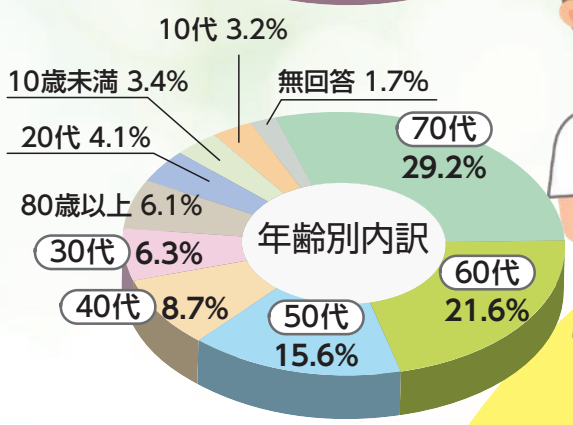
萩原　さがみ
元副看護部長
瑞宝単光章

平成29年度 満足度調査 結果発表！

入院患者さん

●調査対象の内訳

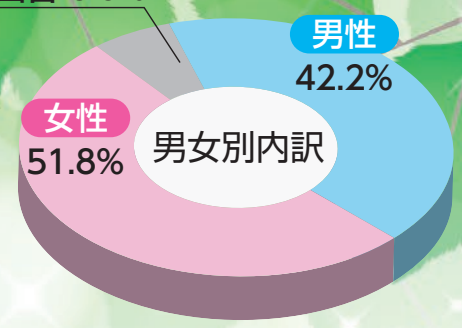


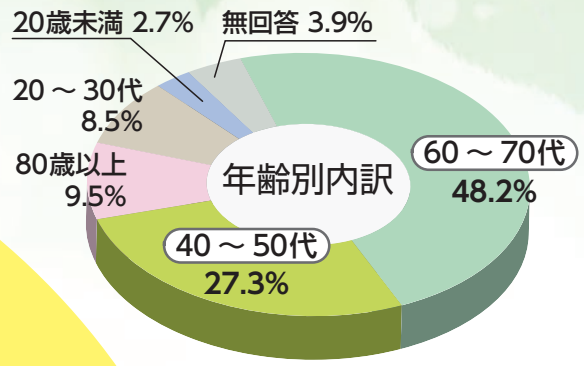


入院患者さん
平均92.9%
（回答数＝653）

外来患者さん

●調査対象の内訳





外来患者さん
平均89.1%
（回答数＝3,721）

●入院患者さん満足度ランキング

ベスト5	1位	薬剤師の態度や言葉遣い	99.3
	2位	職員の身だしなみ	98.9
	3位	リハビリ職員の態度や言葉遣い	98.6
	4位	検査職員の態度や言葉遣い	98.4
	5位	本人や氏名、病名、薬の確認	98.1

ワースト5	1位	トイレや浴室	70.6
	2位	エレベーターや廊下	78.0
	3位	インターネット	80.9
	4位	苦情の受付場所	83.9
	5位	病室の環境	84.6

入院患者さん、外来患者さんを対象とした満足度調査にご協力をいただき、ありがとうございました。このたび平成29年度の調査結果がまとまりましたので、ご報告いたします。

●調査期間
入院患者さん：平成29年10月3日～23日の21日間
外来患者さん：平成29年9月5日～9日の5日間

●調査結果
入院患者さんの92.9%、外来患者さんの89.1%の方に、「満足」「やや満足」のご回答をいただきました。満足度の低い項目は、入院では「清掃」「トイレ設備」「エレベーター待ち時間等」、外来では「会計や診察の待ち時間」「駐車場整備等」でした。

これからも患者さんにとって心地よく、治療に専念できる環境を整えていきたいと考えております。より多くの患者さんのご意見を伺いたいと思っておりますので、今後ともご協力のほどよろしくお願いいたします。

●外来患者さん満足度ランキング

ベスト5	1位	診察室の清潔かつ整理整頓	97.3
	2位	医師のプライバシー配慮	97.2
	3位	医師の態度や言葉遣い	96.7
	4位	看護師の態度や言葉遣い	96.7
	5位	技師の態度や言葉遣い	96.2

ワースト5	1位	駐車場の広さや台数	51.9
	2位	診察までの待ち時間	57.8
	3位	会計の待ち時間	63.8
	4位	会計待ちでの声掛け等の配慮	79.2
	5位	診察待ちでの声掛け等の配慮	79.4

手術部の全身麻酔器がリニューアル

最新の自動制御機能を搭載 患者さんの負担の軽減に期待

本年3月に手術部の全身麻酔器を最新モデルにリニューアルしました。今回導入した全身麻酔器では、これまで熟練した麻酔科医師の経験に基づいて管理していた多くのことが自動化され、その結果として、麻酔科医師が患者さんのケアにより多くの時間を割くことができる余裕が生まれました。

今回導入した最新モデルには従来の全身麻酔器には備わっていなかった自動制御機能が搭載されています。患者さんが必要とする最適量の吸入麻酔薬をいち早く供給するデジタル式の麻酔薬注入装置、患者さんにとって適切な酸素濃度の吸入気を自動的に調合する新鮮ガス流量計、そして、患者さんの体格や呼吸数や換気量を維持する人工呼吸器など、患者さんの呼気の中に含まれる吸入麻酔薬、酸素、二酸化炭素の濃度を継続的に分析しながら手術中の最適な条件を維持していくという機能が備わっています。

特に、手術中に発生する無気肺と呼ばれる肺胞の虚脱を防ぐためのリクルートメント手技までもが自動化され、手術中の肺保護換気が簡便かつ安全に行えるようになったことから、術後呼吸器合併症の発生頻度減少が期待されます。

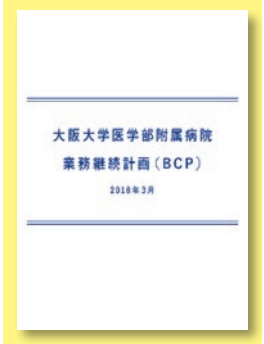
機器のマンマシンインターフェースの面からは、大画面のLEDタッチパネルディスプレイに制御中の管理情報が集中表示されるとともに、もしもこれらの設定条件を変更する必要が生じた場合には、このパネルを最小のタッチ回数で操作することにより、素早く患者さんの状態にあわせて対応することができます。また、自動制御のおかげで安全に経済的な低流量麻酔が施行できるようになったため、手術中の麻酔薬の無駄な消費がなくなり、患者さんの医療費の節減にもつながります。手術終了後には患者さんからの吸入麻酔薬の呼出を促すために、人工呼吸の新鮮ガス流量が自動制御され、より速やかな全身麻酔からの覚醒を提供することが可能になりました。

全身麻酔器は患者さんが眠っている間にその能力を発揮するものなので、患者さんにこれらの優れた性能を実感していただくことはほとんどありません。しかし、手術を受けられる患者さんの安全をいつも静かに見守り続けています（なお、今回の更新は平成29年度と30年度の2年間にわたり計17台をリニューアルする計画であり、残りの半数は平成30年度中の更新となる予定です）。

―「その日が来るまでに」―

災害時の医療継続のための 業務継続計画を作成

（BCP：Business Continuity Plan）



大規模広域地震災害が発生すると、地震に伴い多くの災害負傷者が出て、医療需要が増大します。

それに対し、医療対応に不可欠な院内インフラ障害、エレベーターの停止や医療機器の転倒・落下、非構造部材などの物的被害の発生、商用電力の停電や断水などの間接的被害が医療対応力の低下を増幅させるとともに、入院患者さんや医療関係者の人的被害が出て、平常時の医療対応力の低下も予測され、医療行為の継続を困難にするリスクが発生します。このような状況下でも、本院では、入院患者さんに対する医療継続と災害負傷者の受け入れ及び医療対応にあたらなければなりません。

さらに、停電や断水のため医療継続・災害負傷者対応ができなくなった他病院等からの転院受け入れ要請に対しても応え、災害拠点病院としての社会的使命を果たすことが求められます。

災害時の医療継続のためには、医療継続の基盤である電気の確保、医療継続に不可欠な医療設備、機器や給排水設備、医療ガス設備等の被害を最小化するためのリスク対策を「その日が来るまでに」計画的に強化する必要があります。災害発生時には低下した医療提供機能を評価し、残された人的・物的医療資源（リソース）を効果的に組み合わせ最大限に活用して、医療を提供する責務があります。

これらのことから、この度、本院の業務継続計画（BCP／Business Continuity Plan）を作成しました。計画は業務継続に不可欠なリソースの現状と課題、課題対応という構成内容です。本計画を実災害時に活用できる計画とするために、全職員が普段から防災の視点で日常業務に携わるとともに、過去の災害を「他人事」ではなく「自分事」としてとらえ課題対応に取り組んでまいります。

平成30年度 優秀標語表彰式

平成30年度の標語が決定

接遇・マナー向上目指して

3月9日、病院長室において、野口病院長から4名の優秀標語作成者に表彰状と副賞が授与されました。

患者サービス検討委員会では、職員の一人ひとりが患者さんの立場に配慮できるよう努めるとの主旨で、接遇・マナー向上に関する標語を掲げております。

このたび、院内に標語を募集し、患者サービス検討委員会で検討の結果、次のとおり優秀作品が決定いたしました。

なお、応募者全員に参加賞が渡されております。

4～6月期

「声掛けで　深まる信頼　防ぐ事故」

（リハビリテーション部　作業療法士　上田　佳弥）

7～9月期

「瞳（め）をみて　顔みて　心みて」

（オンコロジーセンター　医療ソーシャルワーカー　井福　亜希）

10～12月期

「気を付けよう　一人一人の　立ち居振る舞い」

（医事課情報処理係　係員　広瀬　一貴）

1～3月期

「手洗いの　ルール守って　感染予防」

（リハビリテーション部　作業療法士　福嶋　由紀子）

平成30年度「病院教授」の称号付与について

病院教授の称号は、大阪大学医学部附属病院における診療・研究・教育の充実のため、特に臨床面で優れた業績が認められる者に対して付与しているものです。

平成30年度は下記の25名に「病院教授」の称号を付与することを決定しました。

番号	診療科等名	氏名	職名
1	呼吸器内科	木田　博	講師
2	免疫内科	楢崎 雅司	講師
3	血液・腫瘍内科	柴山 浩彦	准教授
4	心臓血管外科	戸田 宏一	准教授
5	呼吸器外科	新谷　康	准教授
6	消化器外科（下部消化管、肝、胆）	江口 英利	准教授
7	消化器外科（上部消化管、膵）	山﨑　誠	准教授
8	乳腺・内分泌外科	金　昇晋	准教授
9	眼科	松下 賢治	講師
10	耳鼻咽喉科・頭頸部外科	小川　真	准教授
11	整形外科	村瀬　剛	准教授
12	皮膚科	金田 眞理	講師
13	神経科・精神科	田中 稔久	准教授
14	小児科	橋井 佳子	准教授
15	泌尿器科	今村 亮一	准教授
16	臨床検査部	日髙　洋	准教授
17	手術部	南　正人	准教授
18	放射線部	田中　壽	准教授
19	集中治療部	内山 昭則	准教授
20	輸血部	冨山 佳昭	准教授
21	高度救命救急センター	小倉 裕司	准教授
22	臨床工学部	高階 雅紀	講師
23	化学療法部	水木 満佐央	准教授
24	薬剤部	三輪 芳弘	准教授
25	未来医療開発部	名井　陽	准教授

※上記の称号付与者の職名等は平成30年４月１日現在のものです。

中央診療施設長等ごあいさつ

●移植医療部長

奥山（おくやま） 宏臣（ひろおみ）

４月より移植医療部長を拝命しました。本院は全臓器の移植を行なっている全国でも数少ない施設の一つです。またこの４月より小腸移植が保険収載され、これで全臓器の移植が保険診療となりました。一方で、啓蒙活動や政策の見直しなどにより、脳死臓器提供数も増加しています。このような状況のもと、今後ますます移植医療のニーズが高まっていくことが予想されます。病院職員の皆さんのより一層のご支援をお願い致します。

（平成30年４月１日就任）

●総合周産期母子医療センター長

大薗（おおぞの） 恵一（けいいち）

総合周産期母子医療センターは、母性胎児部門と新生児部門から成り、最重症合併症妊産婦の受け入れや外科的処置を要する新生児及び低出生体重児の治療にあたっており、大阪府から施設認定を受けています。

本院では多職種の連携や診療科間の連携がスムーズで、チーム医療に優れています。大阪府の周産期医療を牽引していく意気込みで、24時間、365日体制で頑張りたいと思います。

（平成30年４月１日就任）

●消化器センター長

竹原（たけはら） 徹郎（てつお）

消化器疾患の治療は大きく内科的治療と外科的治療に分けられます。しかし、患者さんの立場で考えると、これらの治療、そしてそれに至るための診断プロセスは統合的に行われなければなりません。本院ではこのことを円滑に実施するために、病棟に消化器センターを設置しています。当センターでは内科医と外科医が協力して、治療方針の決定やシームレスな治療にあたっています。患者さん本位の診療を実践していきますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

（平成30年４月１日就任）

●てんかんセンター長

貴島（きしま） 晴彦（はるひこ）

てんかんは乳児から高齢者にまで見られる頻度の高い慢性神経疾患です。診療にあたっては、発作のこと、日常生活のこと、仕事のこと、精神的なことなど様々な問題への対応が必要となります。てんかんセンターは平成24年８月の開設以来、大薗恵一前センター長のもと、関係各部門が一体となり関西地区のてんかん診療に大きく貢献してまいりました。引き続き、「世界に広がるてんかんセンター」を目標に社会に貢献したいと考えております。

（平成30年４月１日就任）

●呼吸器センター長

木田（きだ） 博（ひろし）

呼吸器センターでは、胸部腫瘍性疾患（肺がん、縦隔腫瘍など）、急性・慢性呼吸器感染症、びまん性肺疾患（間質性肺炎、COPDなど）、急性・慢性呼吸不全、胸膜疾患（気胸、悪性胸膜中皮腫など）を含む広範囲の呼吸器疾患に対して、呼吸器外科、呼吸器内科、放射線診断・IVR科、放射線治療科が密接に連携し、医師、看護師、理学療法士が共同で診断から治療にあたっています。本院が呼吸器疾患の診療研究拠点として責務を果たせるよう、新谷康副センター長及びスタッフ一同で努力していきたいと思います。

（平成30年４月１日就任）

●医療技術部長

前田（まえだ） 育宏（いくひろ）

医療技術部は、検査、放射線、リハビリ及び臨床工学各部門に所属する医療技術職員を一元管理し、効率かつ適切な要員配置を行い、病院運営、診療支援及び患者サービスの向上に努めることを目的とした多種多様の職種集団であります。

平成17年の医療技術部の創設以来、医療技術部長は私で５代目になりますが、歴代部長の方針を堅持して医療技術部内の相互理解を深め、専門技術のスキルをより一層高めて良質な医療技術を提供することで、さらなる病院の発展に貢献していきたいと考えております。今後も皆様方のご協力とご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

（平成30年４月１日就任）

●糖尿病センター長

下村（しもむら） 伊一郎（いいちろう）

４月１日付けで、糖尿病センターが開設されることになりました。旧七帝大の大学病院では初めての糖尿病センターです。栄養マネジメント部、糖尿病ケア・看護外来とともに、小児科、糖尿病・内分泌・代謝内科、老年・高血圧内科を中心として、ライフステージに応じたきめ細やかな糖尿病診療、そして糖尿病合併症予防治療・療養を目指します。地域連携ならびに糖尿病診療のプラットフォームとして、本院のさらなる発展に尽力したいと思います。

（平成30年４月１日就任）

●がんゲノム医療センター長

森（もり） 正樹（まさき）

本年２月16日付けで全国11病院のがんゲノム医療中核拠点病院のひとつに本院が指定されました。がんゲノム医療はがん細胞の遺伝子の異常を詳細に調べ、最も効きやすい薬を臓器の枠を超えて適切に使用したり、薬の副作用の出やすい人を見つけたりします。また、ゲノムデータを解析して治療に適する新たな分子を見つけることもします。医師、検査技師、看護師、遺伝カウンセラーなど多くの人が関わっており、より良い治療に結び付けたいと思います。

（平成30年４月１日就任）

麻酔科

最大限の安全に配慮した全身管理と疼痛緩和

麻酔科の業務は手術室だけでなく、集中治療室や疼痛部門(ペインクリニック)、さらに緩和ケアなど非常に広範囲です。

手術室においては、局所麻酔を除く全ての症例の麻酔管理(全身麻酔、腰椎麻酔、伝達麻酔など)を行っています。心室補助循環装置植え込み術、ロボット手術、経カテーテル的大動脈弁置換術など難易度の高い手術のほか、重症症例やハイリスク症例などの麻酔管理に携わっています。産科と連携し、無痛分娩を麻酔科医主導で行う体制もスタートしました。無痛分娩のニーズは増加しており、麻酔管理に対する理解を深める無痛分娩教室を月1回程度実施しています。

また、本院は全臓器移植の認定施設であり、移植を待つ患者さん(小児や新生児を含む)の全身管理はもちろん、他の医療機関でドナーが発生した場合、麻酔科医を派遣して臓器を摘出し、移植までの臓器管理も行っています。

救急搬送はもちろん、大阪府内の病院から重篤な患者さんが転院されるため、新生児や高齢者を含む麻酔管理症例数は年間6600例を超えています。予定手術以外に緊急手術の管理も多く、経験豊富なベテラン医師1名と若手麻酔科医1名の2名体制を基本として、手術中の不測の事態に備えています。

ペインクリニックも実施しており、外傷後などの慢性疼痛の専門外来を設置しています。1日あたりの外来患者数は20～50名程度。ほかにも、難治性がん性疼痛に対する高度な神経ブロック治療などにも積極的に取り組んでいます。

現在、大幅な増床が行われている特定集中治療室(高機能ICU)においては、麻酔科医がスタッフの3分の2を占めており、臓器移植などの場合も、手術後は集中治療室で回復までの管理を行います。

当科は麻酔科医の教育にも力を入れています。全身麻酔と集中治療の研修は基本的に必修で、重症患者管理の能力を高める研修プログラムを提供しています。

またICUを含めて麻酔科医5名が常に当直する当科の体制は、全国の病院のモデルケースでもあるため、見学や研修の希望も多く、当科において厳しい症例の経験を積んだ麻酔科医が各地の医療機関で活躍しています。

胎児診断治療センター

胎児は一人の患者さん

診療科の枠を超えたチーム医療

近年、胎児診断技術の進歩により、出生後の治療を円滑に始めることができるようになりました。さらに、出生前から治療を始めることで、より良い予後が期待できる疾患も明らかとなってきています。このような疾患の診療にあたっては、胎児を一人の患者さんとみなす、新たな診療体制が必要となります。そこで本院では、平成27年9月に胎児診断治療センターが開設されました。奥山宏臣小児外科長がセンター長を、遠藤誠之産婦人科講師が副センター長を務めております。

当センターでは、胎児の疾患に関わるすべての診療部門が連携し、産まれてくるお子さんとそのお母さんにとって、より良い治療を提供することを目指しています。産婦人科、小児科(新生児グループ、小児外科、脳神経外科、心臓血管外科、整形外科、泌尿器科、麻酔科、放射線科、遺伝子診療部及び保健医療福祉ネットワーク部、さらには大阪大学歯学部附属病院の口腔外科等、関連各科の医師ならびにメディカルスタッフ(看護師、助産師、臨床心理士、遺伝カウンセラー、ソーシャルワーカーなど)が各診療科・診療部門の枠を超えてチームとして、胎児診断診療に取り組んでいます。

具体的な診療内容は次の通りです。

①胎児疾患の診断

様々な手法(超音波、胎児MRI、胎児CT、NIPT、羊水検査、絨毛検査、遺伝子診断など)を使用して出生前診断を行います。

②胎児疾患のスクリーニング検査

妊娠初期・中期・後期の胎児スクリーニング検査を行います。

③胎児疾患の胎内治療

内科的・外科的胎児治療を行います。必要時には、全国の胎児治療施設へ円滑に紹介いたします。

④母体保護法に則った処置

必要時には、母体保護法に則った処置も行います。産科麻酔の併用や、臨床心理士による心理的サポート、遺伝子診療部で遺伝カウンセラーや臨床遺伝専門医による今後の展望についての遺伝相談なども積極的に行います。

⑤胎児疾患に関わる社会的問題に関すること

社会的・心理的サポートを行います。

⑥胎児疾患に対する先進的治療に関すること

子宮外胎児治療、胎児幹細胞移植など、日本では未だ実施されていない胎児治療についても、全国の胎児診断治療施設と密に協力しながら、前向きに検討し、導入を行います。

開設以来、大阪府下のみならず、京阪神、全国の医療機関より紹介される患者さんが増加しています。今後も、胎児診断法・治療法の進歩に伴い、より多くの赤ちゃんとそのご家族の受け入れができるよう、チームで力をあわせて頑張っていきたいと考えております。

当科は、どのような手術であっても、それぞれの患者さんの病態に合わせ、最大限の安全に配慮した麻酔管理を行っています。ていねいな説明を心がけていますので、安心して手術や痛みの治療を受けていただけます。

病棟のトイレを順次改修

患者満足度調査(P.2参照)で特に要望が多かった洋式トイレの増設について、改修(病棟の和式トイレの洋式化)を平成29年度から順次進めております。今年度からは浴室も改修の予定です。工事期間中は、入院患者さんをはじめ、皆様に大変ご迷惑をお掛けしますが、何卒ご理解、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

ホスピタル ミニ・ニュース

PHOTO　TOPICS

春のミニコンサート

4月13日

「未来医療フォーラム ～一緒につくろう！未来医療～」を開催

2月3日、ヒルトンプラザウエストにて「未来医療フォーラム～一緒につくろう！未来医療～」と題した市民フォーラムを開催しました。

3回目となる今回のフォーラムでは、厚生労働省の佐原康之大臣官房審議官から「がんゲノム医療の普及に向けて」、日本医療政策機構の宮田俊男理事から「臍帯血問題などから日本における医療の未来を考える」と題した講演が行われました。

本院からは、山本洋一未来医療開発部臨床研究センター長が、質の高い臨床研究・治験を目指す取り組みについて、澤芳樹心臓血管外科長が、心筋再生治療の橋渡し研究について講演を行いました。

本院はこれからも臨床研究中核病院として、未来医療の実現のために多くの成果を市民の皆様に向けて発信していきます。

国際医療シンポジウム「Go Global!! 12」を開催

2月10日にグランフロント大阪コングレコンベンションセンターにおいて、第12回大阪大学国際医療シンポジウム「Go Global! 12」を開催しました。

当日は、文部科学省未来医療研究人材養成拠点形成事業5カ年の総括として「グローバルヘルスの未来」をテーマに、国際医療とその人材養成について講演が行われました。北海道大学、東京大学、九州大学から講演者を招き、本学の長谷俊治欧州拠点長と中谷比呂樹WHO執行理事も、グローバルな視点に立った医療人材の育成について講演を行いました。今後も本院では、国際医療の進展と国内外の協力連携を進めてまいります。

野口前病院長「おすすめ御膳」

●お品書き：ミートグラタン・サラダ・ポトフ・ピラフ・デザート

秋深まる季節に、人気メニューの中から患者さんに是非味わってほしいと野口前病院長が選んだ「グラタン」。具材に秋の味覚のきのこを加え、温まる蕪のポトフとともにご提供しました。

病院食ではめずらしいピラフや、手作りのかぼちゃ豆乳プリンも喜んでいただき、病棟では笑顔とはずむ会話で、にぎやかな食事の時間となったようでした。

スカイレストランとのコラボメニュー

メタボレスメニューは、「体にやさしいお食事」をコンセプトに、本院管理栄養士とリーガロイヤルホテル スカイレストランシェフがコラボレーションしてご提供するコース仕立てのお料理です。平日ランチタイムのみのご提供ですが、事前予約も可能となりました。

本院でしか味わえない特別なメニューを、14階スカイレストランで是非お召し上がりください。

美味しく食べて脱メタボ
～メタボレスメニュー～